

# 大仙院庭園考

清水正之・山本繁雄

大仙院庭園は紫野大徳寺山内本坊北側にあつて、大徳寺の中でも特に枢要な位置を占めている。開基は大聖国師古岳宗亘、庭園の築造期は高桐院に伝わる文書に、大仙院棟梁札写しとして、「永正十癸酉年二月十二日 上棟住持比丘宗亘大工十郎宗次、棟梁 次郎右衛門宗久誌焉」とあることから、永正十年（1513）から間もなく庭が造られたものとして室町末期の作として認められてきた。

## 1. 古岳宗亘作庭説

作庭者は寺伝によれば、従来は相阿弥の作であるとしていたが、最近では、古岳宗亘作庭説をとっている。

それは古岳滅後三年天文二十年（1551）驢雪鷹瀨が書き留めていた「故大徳正法大聖国師古岳大和尚道行記」に「……法筵之盛可視焉。端居丈室、近傍者少。禅余栽珍樹、移怪石、以作山水趣者、猶如靈山和尚。所謂先聖後聖一揆耳。」と書かれていたことによるものである。

靈山和尚は即ち徹翁義享のことで、徹翁の作った徳善寺の庭は、大徳寺の南、今の松源院、養徳院、寺前の民家を含めた広大なものであったといわれるが、その後は消滅してしまった。

驢雪和尚の道行記では、「法筵の盛んなること見るべし。丈室に端居すれば、近付くもの少なし。（威厳があつて……）禅余は珍樹を植え、怪石を移す。」とあることから、禅余の時間には、傍らに人が居ない状況で、珍樹を植え、怪石を移して楽しんでた。……とすることになる。

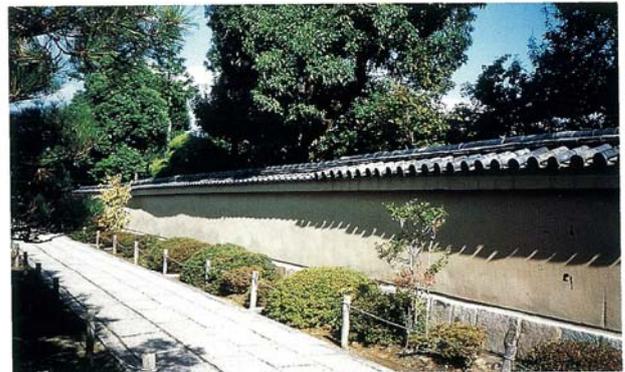
室町期の禅林においては、盆栽が非常に盛んであつた

から、この珍樹怪石は盆栽のことをさして言っていると考へた方が良さそうに思へる。（註．丸島秀夫著「日本盆栽盆石史考」の中世盆栽史）龍安寺の石組みは盆栽の一つである盆石から生み出されたものだとする江山正美氏の研究もある。

しかし、後段の、「いわゆる先聖と後聖、揆を一つにするのみ。」は、作庭のことを言っているものと解釈すべきであろう。

盆栽愛好家が作庭出来ない訳ではなく、足利義政、善阿弥はいずれも愛盆家であり、銀閣の作庭者であることは周知の事実である。

享祿三年（1530）今宮神社参拝の帰り道に、大仙院を訪れた鷲尾隆康が、「近頃見事なり」と「二水記」の中に書いていることから、古岳宗亘の作った庭が実在していたことは間違いない。



宗亘墓所松関の外観

ところが高桐院所蔵の「烏焉集」には、「大仙院在紫野方丈北、乃大聖国師塔所也。塔側有假山。其制極妙、其趣無尽。」とあることからすると、古岳宗亘作庭による庭

園は、自ら塔所（墓所）にえらんだ松関と稱せられている大仙院の北隅、大聖国師塔所の側方、現在の拾雲軒との間（後述）に存在したものと考えられる。

## 2. 相阿弥作庭の移築説

「雍州府志卷之四」に「大仙院之仮山東山同朋相阿弥之所作、而始在室町家臣水淵氏之家園。爾後移斯庭也。」とあって、大仙院の庭は足利将軍の家臣水淵氏の家にあった相阿弥作の庭園を移したのもだとしている。

「京羽二重織留 卷之二」にも「この院の庭は東山殿同朋相阿弥、水石を畳みし所にして観音石、虎の頭石など種々の奇石あり。

この庭の景象始めは室町家の臣水淵氏の園にありしを、後にこの院に写し待るなり。」と書かれている。

水淵氏とあるのは三淵氏の誤りであって、「細川家記」とも云うべき「綿考輯録」にその来歴が記されている。

即ち、「三淵家の元祖は足利三代目之将軍義満公之御子、御母は細川氏なり。

四代之将軍義持公諱辞を賜わり、掃部頭持清と稱し、四品に叙し、大和守と云、山城之国三淵之邑を被下故に三淵を氏とせらる。……」とある。

このようなことは妙に続くものであって、細川幽齋、旧姓三淵藤孝も十二代足利義晴の落胤であった。

後奈良天皇は、公卿の近衛尚道の娘と、足利将軍義晴との結婚を望まれた。

ところが一方では、藤孝の母は、義晴の胤である藤孝を妊娠（ミゴモ）っていたのである。結局義晴は、当時妻を亡くしていた三淵晴員に、彼女を妊娠したままで嫁がせたのである。

三淵伊賀守晴員の家には既に長男大和守藤英がおり、又後に天文十五年（1546）三男玉甫（同母弟）が生まれている。

三淵の家は、このようなものであった。

大仙院庭園の相阿弥作庭説は、「槐記」「都林泉名勝図絵」「笈埃随筆」などすこぶる多い。こんなことから寺伝は相阿弥の作庭と伝えていた。

実は大仙院の外、竜安寺庭園など相阿弥作庭と伝えら

れる庭がいくつかあるが、作庭したという記録がないことから、相阿弥作庭説は造園界では否定されている。

相阿弥は大永五年（1525）に亡くなっているが、彼程の審美眼があれば、造園職人の人達を指図して庭を作るということは容易であったと思われる。

古くは巨勢金岡、百済川成、近くは雪舟、狩野元信等絵師で作庭家を兼ねた人は少なくない。相阿弥が庭を作ったという記録がないという理由だけで、寺伝を否定するのは少々狭量ではないかと思われる。

さて、三淵大和守藤英のことに話を戻そう。

足利十五代将軍義昭は暗愚の質で、はじめ織田信長の力を頼って将軍位を獲得し、一時は「わが父信長殿」とまで云いながら、次第に信長を疎ましく思うようになり、武田、上杉、朝倉の諸勢を頼み、遂に信長追討の兵を挙げた。時に天正元年（1573）三淵藤英は二條の御所を守り、義昭は宇治槇島城に籠って信長の大军を迎え撃った。

忽ちにして戦いは敗れ、義昭は和を乞うて剃髪追放の処置をうけ、大和守藤英は、明智光秀の居城坂本城で切腹させられた。

この頃藤孝は長岡勝竜寺城を回復し、三淵家五男好重（当時十三才）を長岡姓に改めさせて幕下の一員に加えたのである。

大山平四郎氏は自著「日本庭園史新論」の中で、「三淵家は山城国三淵庄に住んでいたもので三淵を姓とした。三淵家六代目の晴員は細川家の出身であって、伝統的に庭園を愛した。したがって現在の京都市左京区岡崎にあった自庭に庭園を作らせたことは推測するに難しくない。晴員には五人の子息があり、長男は七代目を継いだ大和守藤英である。

次男の藤孝は細川家の養子となって後年幽齋と号し、三男は大徳寺塔頭高桐院を創建した玉甫紹琮である。この玉甫和尚が大徳寺にいたのを機縁として、岡崎にあった三淵邸の庭石が大仙院へ移されることになったと推定する。天正元年織田信長は二條第を包囲し、翌二年七月三淵家七代目藤英は大津の坂本城に逃れ、ついに戦死した。主人を失った三淵家について、誰もが気にするのは岡崎の屋敷にある庭園の名石である。そこで大仙院に引き取られたのは、藤英が戦死した直後であると推定する。

引き取った理由を述べると、勝者が敗者の庭石を奪取するのは、織田信長ならずとも戦国の掟である。

それ故に玉甫和尚は、信長から庭石を奪われないうちに大仙院へ急ぎ引き取ったと推定する。」としている。

大山氏の説には幾つかの誤りがあると思われる。

前掲の「綿考輯録」には、「晴員居宅は室町花の御所近隣といえども、本宅には入れず、直ちに懐婦を東山の麓岡崎の別所（藤孝公栄産の地なり。その後若狭少将勝俊入道長嘯遁世の地となる。しばらく蟄居の由なり。その後聴松院と言う寺となり、南禅寺塔中として今在せり。）に移せられ置きて、晴員逢い見給うなく、栄産あってしばらくして嫁がせらるなり。世挙げて晴員の貞心を感じせしむるとなり。」とあることから、岡崎邸は仮の屋敷であって、庭石のあったのは花の御所の近くにあった三淵家の本邸であると考えられる。

同じ「綿考輯録」に、「天文八年……この時伊賀守殿藤孝君の五才になり給うを義晴公に謁せしめて、それがし小身（貧乏）なり。この子をよき家の養子になしたき由申され、然らばとて細川元常君のご養子たるべき由を命ぜらるなり。」とあり、確かに養父三淵伊賀守晴員は細川家の出で、三淵家の養子にはいったものであるが、晴員の頃の三淵家はかなり経済的には逼迫していたようで、三淵家創設に近い時室町の本邸に庭園があったと考える方が自然である。

大和守藤英が坂本城で戦死というもおかしい話で、当時の坂本城は明智光秀が預かっていた。織田信長の命で切腹させられたものに間違いはない。

大山氏の云われる「……信長から庭石を奪われないうちに、大仙院へ急ぎ引き取った。」ことも当時の状況からは考えられない。

直前の元亀二年十二月義昭と連携した武田信玄がいよいよ西上を開始して、三方ヶ原の戦いが行われ、信長の唯一の味方であった徳川家康が散々に破られている。

天正元年四月信玄は亡くなったが喪は秘められたままで七月信玄と呼応した將軍義昭の追放に、ようやく信長は成功した。又直後の八月には朝倉義景、浅井長政を滅亡させたのである。

翌二年三月信長は自ら大和多聞山城に入り勅許を得て

正倉院の名香蘭奢待を切った。

九月には伊勢長島の一向一揆を平らげている。いづれも將軍義昭の机上の夢から生まれた信長包囲網ではあったが、信長の一生の中で最も危ない最も慌ただしい時期に遭遇していたのである。信長自身は庭どころではなかった。また大仙院の庭はどさくさの内に行われるようなやつつけ仕事では、到底作ることの出来るものではない。

大徳寺の管長は代々最大の塔頭である大仙院に入る慣わしになっていたようで、古岳宗亘の後は、大林宗套、江隠宗顕、笑嶺宗訢、春屋宗園、古溪宗陳、玉甫紹琮とつづく。

「綿考輯録」によると、「天正十四年（1586）今年大徳寺玉甫和尚（紹琮は古溪宗陳の法嗣 藤孝君の御実弟なり。）入院これ有り。これ秀吉公の命によりてなり。

即ち幽斎君を御奉行におうせつけられ候。」とあって大徳寺を玉甫が嗣いだのは、天正十四年で細川藤孝が秀吉の命令を伝達したことが分かる。

高桐院は細川三斎忠興が、父幽斎のために建立した。開基は特賜大悲広通禅師、すなわち玉甫紹琮である。玉甫は幽斎の実弟で、慶長十八年（1613）六月十八日自寂し、幽斎は慶長十五年の逝去である。



玉甫開山高桐院山門

高桐院はこの数年の間に創立された。

三淵邸庭園の移築は、藤英切腹の天正二年（1574）から、玉甫が自寂した慶長十八年（1613）の30年間であることは間違いはないが、玉甫入山の天正十四年（1586）から遠くない時期と考えられる。

因に天正十三年七月秀吉は関白に任ぜられ、翌十四年十月秀吉は家康を大阪に迎え、十二月太政大臣となり、

豊臣の姓をうけている。この頃の幽斎は隠居していたが、在洛料として旧領の長岡勝竜寺村その外三千石を秀吉から拝領している。

玉甫にも、幽斎にも最も好都合な時期であったように思われる。

実は高桐院には大仙院の棟札の写しがあるだけでなく、古岳和尚が端居していた丈室に掲げられていた筈の生茗書（古岳雅号）の款名の入った「拾雲」の額も高桐院に残されているのである。これは玉甫の時に方丈が建て替えられ、その時の遺品が高桐院に伝えられたものと考えた方が自然である。

東海和尚は有名な沢庵宗澎であるが、「東海和尚記年録」には、「慶長十九年（1614）申寅、四十二歳、八月、大仙院の書院を建てる。この地昔拾雲軒の旧跡なれば「拾雲」の二字をもって書院の額となす。

檀家の施すところの物みな自用にあてず、かかることのみで費やす。」と書かれている。沢庵宗澎は但馬出石の

城主、小出大和守吉英の寄進をうけて、大仙院に書院を作ったのである。

しかもそれは昔古岳和尚の丈室であった「拾雲軒」の跡であることを、沢庵はよく知っていて書院を建てた。

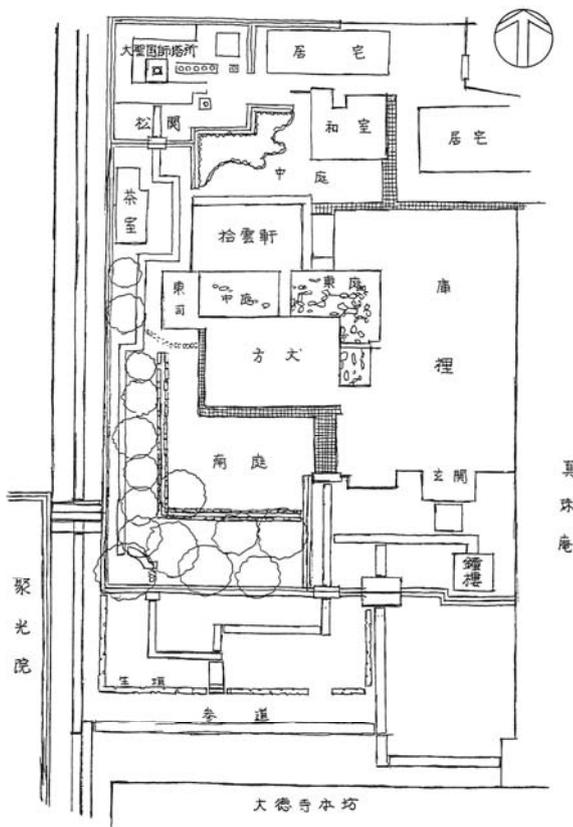
このことは古岳和尚の時の方丈がその場所から姿を消していたことを物語るものであって、高桐院に「拾雲」の掲額が伝えられている事実と共に、方丈が移築又は改築されたことは間違いない。

「拾雲軒」は現在の大書院の北側に位置し、大聖国師古岳宗亘の塔所にも近く、「……塔側有假山。其制極妙、其趣無尽。」と烏焉集に書かれている古岳和尚の作庭跡は恐らくは「拾雲軒」の北側にあったものと考えられるが、石組みは現在では見られない。

### 3. 大仙院庭園の心髄

大仙院庭園は竜安寺庭園と共に日本における枯山水庭園の代表的作品として称えられてきた。しかし造園手法において竜安寺庭園は極端に象徴化を図り、石の数を制限し、しかも用いるところの石は特に美しい名石は殆ど見られない……と云うようにデフォルメ化された抽象芸術の美を見せるのに対して、大仙院の庭園は水墨画をそのまま庭石を用いて表現し、多すぎる様に思える庭

大仙院山内配置見取図



大仙院滝石組



大仙院滝石組

石もすべてが選び抜かれた名石によって構成されていて、しかも一分の隙もなく混然一体となった具象芸術の極致を示し、さながら一幅の山水画を見る心地にさせてくれる。

石組みの精巧さ、技術の高さは秀逸で、名石を綺羅星のように揃えながら、全体として少しの違和感もなく見事に統一されているのは、余程その技術力が優れているからであって、しかもその技術力を駆使しながら作品全体を鋭い眼差しで見守っている高度なテクノクラートの存在を感じない訳にはいかない。

恐らく優れた技術をもつ山水河原者の作庭家集団が作庭に参加し、相阿弥程の絵心のある人が指図したのでなければ、この庭は生まれて来ないものと考えられる。

特に長船石は和船ではなく、相阿弥が心酔していた中



大仙院長船石

国へ渡航する外洋船の形をしていることも面白い。

少なくともこの庭は、古岳和尚が禅余に作り上げた素人の手慰みでないことは、造園家であれば誰でも理解できる。

大仙院の庭園は、多すぎるぐらいの庭石が存在するた

めに、古岳和尚の作った石組みが一部に組み入れられて保存されている可能性もある。重森三玲氏も「推賞 日本の名園」の中で、「……………おそらく本庭は、開山古岳和尚が現存鶴亀だけの庭を作庭したのと考えられる。この部分のみは青石ではない。……………鶴島亀島のみは庭石も異なり、一応最初にできたが、青石による北宋山水式の石組みは、やや年代が下って（三淵家の庭を移築して）構築されたと考えられるので後考に待つ。」としておられる。

尤もなことであると考えるが、大仙院の方丈が移築改築されたものと考えたと、宗亘の作った庭と三淵家より移設された庭が、何の違和感もなく一体の作品として存在することはあり得ないものと考えられる。

上述のように大仙院庭園は一幅の山水画のように、大自然を30坪の庭園の中に余すところなく収めて、しかも寸分の隙もない。

異なる二つの作品を合体させて、このような緊張感に満ちた空間を作り上げることが出来るだろうか。

造園家の端に連なって、造園作品に心魂を擦り減らしてきたものの経験から判断しても、作品としての統一性の重要さからみても、それはあり得ないことと思われる。

#### 4. 「武功夜話」による考証

ところで聚楽第が出来上がり後陽成天皇の行幸を仰いだのが、天正十六年四月十四日のことであるが、これより先聚楽第の築庭には、細川幽斎（54歳）、千利休（67歳）、前野但馬守長康の三者が協力して当たったことが、「千代女書留」の中に記されている。

これは「武功夜話拾遺」と言う聚楽第の造営奉行を務めた前野但馬守長康（1528～95）に近侍した家臣達の聞き書きを編集したもので、その巻七に「千代女書留」がある。

「一、将右衛門尉様（前野長康）、この度の大役 心致され、玄旨入道（細川幽斎）に相談仕るところ、入道介添えと相成り、利久居士屋敷へ罷り越し、築庭の儀、御指南願い上げ候ところ、速やかにご承諾に相成り、己の費え等一切構わず、聚楽に出仕、ご自身御指図、太閤殿

下の意に叶うよう、河原者棟梁五郎兵衛等、百有余名召し連れられ、ご自身、洛北白川在辺りまで御出張、彼の谷、この谷より大石、小石、さてはどこそこの古寺より心したる名石を引き出し、配石仕れば、深山滝落しの様体、果ては大川となり、大海にそそぎ、蓬菜の島を象り、さながら一幅の絵のごとし。さても見事なる築山、洛中に比類なし。太閤殿下、至極御満悦、御機嫌斜めならず候。かくて太閤、御帝の聚樂への行幸願い上げ奉る。」

「利久の死」の中で小松茂美氏は、「このように、この壮大美しい大建築（大庭園？）は、前野但馬守長康と細川幽齋、千利休の三者の共同設計のもとに完成したものであったのだ。」と書かれている。

しかし、「千代女書留」の中の「……深山滝落しの様体、果ては大川となり、大海にそそぎ、蓬菜の島を象り、さながら一幅の絵のごとし。……」とあるのは、聚樂第庭園の説明ながら、まるで大仙院庭園のことを指しているように聞えるではないか。

三者の共同設計であることは間違いのないにしても、聚樂第庭園のテーマは大仙院のテーマをそのまま持ち込んだものであり、細川幽齋をそこまでに駆り立てたものは、ごく最近に自ら手掛けた大仙院庭園の強烈な残像の所故ではなかったのだろうか。

大徳寺に玉甫和尚が入山したのは天正十四年（1586）で、大仙院庭園の開設はそれから遠くない時期であろうと指摘した。

そして恐らくは玉甫和尚の兄細川幽齋の助力と財政的援助によって、旧三淵家の庭園は大仙院の庭園として蘇ったものに違いない。

天正十四年か十五年のどちらかであろう。

作庭に従事した庭師は河原者棟梁五郎兵衛であったかもしれない。

古岳和尚の庭石は聚樂第に運ばれて大仙院から消えたものかも知れない。

「武功夜話、千代女書留（前野家文書）」は1988年3月の初版であるが、小松茂美氏「利休の死」、中江克己氏「秀吉をめぐる女たち」に逸早く資料として利用され、第一級の資料であり、聚樂第の作庭状況がはじめて明らかになった意義は極めて大きい。中でも聚樂第の作庭に、細

川幽齋が、前野長康を介添えしたことが示され、幽齋が作庭についてすでに一家言をもっていたことが知れる。

間違いなく幽齋は、三淵邸に残されていた庭園の価値を誰よりもよく知っていた。

大仙院へ移す場合も、忠実に元の姿の復元に努めたことだと思われる。

改めて庭園の原作者は誰かと言うことが問題になるが、後考に託したいと考える。

### （参考文献）

久恒秀治著 「京都の名園」

京都林泉協会編 「推賞日本の名園」

大山平四郎著 「日本庭園史新論」

出水叢書 「綿考輯録」

日本の庭園美 5 「大仙院」

小松茂美著 「利休の死」

細川護貞著 「細川幽齋」

新人物往来社刊「武功夜話拾遺」